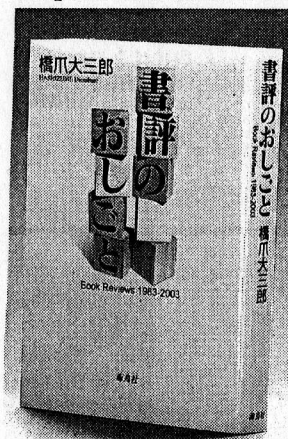


「書評のおしごと」

橋爪 大三郎著



一回八百字の「書評」も五十編集集すれば四万字、原稿用紙でちようと百枚の量になる。

かりにもし、同じ評者の「書評」を一冊の本にまとめたとしたら、どんな主調音が流れてくるのか。小説でもない、一つのテーマを思索した評論でもない。ちくはくでいて、何か評者独自の通底した世界と情報の発信が見えやしないか。私個人、本紙への「書評」が四十回を超えたあたりからそんなことを漠然と考えていた折、嘘だろうというように、そのままを本にしたものが現れた。

と言ってもこれはスケールが違う。何と二十年にわたり、新聞や文芸誌を中心に書かれてきた「書評」百九十八編を、八つのジャンルに分け編集、「書評の最良の教科書」と銘打っているのだ。

「書評」をすべて読み終わり、大きく三つの読後感に浸された。

一つは、評者と同じように共感を持ち、本

微かな響きに耳をすませる

の内容へ興味を湧き上がること、今すぐ手にとって読んでみたいという思い。もう一つは直接本を読まなくとも、「書評」だけで何だか過不足なく本に目を通したような気になる錯覚した充実感。更に一つは、読む視点は、読者各様であることは重々承知しながらも、どうも勘所がずれているのではないかと、評者の見識への疑いに近い異和感ともどかしや。

あとがきで著者は言う。

「書評」は書き慣れることがない、難しい作業である。最後まで本を読み込み、耳をすまし、聞こえてくる微かな響きを手がかりに最初の一行をたぐり寄せる作業に半分の時間が必要なのだ。けだし納得である。

ちなみに、対象となる著者の数の多い方から列挙すると、吉本隆明（五回）、竹田青嗣（四回）、加藤典洋、西部邁、柳美里（二回）、その他多彩な顔ぶれで、その偏りのなさに驚かされる。できるだけ幅広い分野の作者と良書を積極的に紹介しようとしてきた評者の姿勢もうかがえる。ネット書評のような場も増えている中、書き手、読み手の参考本として気軽に開くのもいいかもしれない。

評・宮本誠一（小規模作業所「夢屋」代表）